

邯鄲

シテ 盧生

子方 舞人

ワキ 勅使

脇連 大臣（数人）

興昇（二人）

間狂言 邯鄲宿の女主

〔次第〕

シテ、浮世の旅に迷ひ来て、浮世の旅に迷ひ来て、夢路をいつと定めん。

抑々これは蜀の國の傍に、盧生と申す者なり。我人間にありながら佛道をも願はず。唯茫然と明し暮すばかりなり。眞や楚國のやうひさん（羊飛山）に。貴き知識のまします由聞き及びて候程に。身の一大事を尋ねん為。只今やうひさんへと急ぎ候。

〔道行〕

住み馴れし國を雲路の後に見て、國を雲路の後に見て。山復山を越え行けば。そこしも無き旅心。野暮れ山暮れ里暮れて。名にのみ聞きし邯鄲の。里にも早く著きにけり、里にも早く著きにけり。漸う急ぎ候程に。これははや邯鄲の里とかや申し候。未だ日は高く候へども。此處に旅宿せばやと思ひ候。いかに此の内へ案内申し候。

間狂言、案内とは誰にて渡り候ぞ。

シテ、旅の者にて候一夜の宿を御貸し候へ。

間狂言、易き間の御事にて候、ここの御通り候へ。見申せば一人旅にて候が、何處より何方へ御通り候ぞ。

シテ、これは蜀の國よりやうひさんへ通る者にて候。

間狂言、それは何故羊飛山へは御通り候ぞ。

シテ、我人間にありながら佛道をも願はず、唯茫然と明かし暮すばかりなり。眞や楚國のやうひさんに、貴き知識のまします由聞き及びて候程に。身の一大事を尋ねん為さて、やうひさんへと志し候。

間狂言、是は遙々の御旅にて候、さて妾は古、仙の法を行い給う御方に御宿を参らせて候えば、御宿の為と仰せられ、邯鄲の枕と申すを賜わりて候。これを召して一睡まどろみ給えば、少しの間に夢を御覽じ、来し方行末の悟を御開きある枕にて候。これを召され一睡まどろみあれかしと思ひさむろう。

シテ／さて其の邯鄲の枕とやらんはいづくに候ぞ。

間狂言／あれなる大床なるが邯鄲の枕にて候。妾は其内に粟のおだいを拵え候べし。

シテ／げにげにこれは聞き及びし邯鄲の枕なるべし。これは殊更門出の、世の試みに夢の告。天の與ふる事なるべし。

同音／一村雨の雨宿り、一村雨の雨宿り。日はまだ残る中宿の、仮寝の夢を見るやと。邯鄲の枕に臥しにけり、邯鄲の枕に臥しにけり。

ワキ／いかに盧生に申すべき事の候。

シテ／そも如何なる者ぞ。

ワキ／楚國の帝の御位を盧生に譲り申さんとの、勅使にこれまで参りたり。

シテ／思ひ寄らずや王位には、そも何故にそなはるべき。

ワキ／是非をばいかで量るべき。御身代を給ふべき。其の瑞相こそましますらめ。時刻移りて叶ふまじ。はや御輿に召さるべし。

シテ／こはそも何と夕露の、光輝く玉の輿。乗りも慣はぬ身の行くへ。

ワキ／かかるべしとは思はずして。

シテ／天にも上る。

シテ、ワキ／心ちして。

同音／玉の御輿に法の道。榮華の花も一時の。夢とは白雲の上人となるぞ不思議なる。

〔真ノ来序〕

有難の氣色やな、有難の氣色やな。もとより高き雲の上。月も光は明らけき。雲龍閣や阿房殿。光も充ち満ちて、げにも妙なる有様の。庭には金銀の砂を敷き。四方のかごめの玉の戸を。出で入る人までも、光を飾る装は。真や名に聞きし寂光の都喜見城の。樂もかくやと思ふばかりの氣色かな。

千顆万顆の御寶の、數を連ねて捧げ物。千戸万戸の旗のあし。天に色めき地に響く。禮の聲も夥し、禮の聲も夥し。

シテ／東に三十餘丈に。

同音／銀の山を築かせては。金の日輪を出されたり。

シテ／西に三十餘丈に。

同音／金の山を築かせては。銀の月光を出されたり。譬へばこれは。長生殿の裏には、春秋を富めり。不老門の前には、日月遅しといふ心をまなばれたり。

大臣／／いかに奏聞申すべき事の候。

シテ／そも何事ぞ。

大臣／御位に即き給ひてははや五十年なり。然れば仙薬を聞き召されば。御年一千歳まで保ち給ふべし、さる程に。天の濃漿（こんづ）や沆涯（こうがい）の盃。これまで持ちて参りたり。

シテ／そも天の濃漿とは。

大臣／これ仙家の酒の名なり。

シテ／沈涯の盃と申す事は。

大臣／同じく仙家の盃なり。

シテ／壽命は千代ぞと菊の酒。

大臣／榮華の春も。

シテ／萬年。

大臣／君も豊に。

シテ／民榮え。

同音／國土安全長久の、榮華も彌増に。猶喜はまさり草の。菊の盃取り取りに、いざや飲まうよ。廻れや盃の、廻れや盃の。流は菊水の、流に牽かれて疾く過ぐれば。手先づ遮る菊衣の。花の袂を翻して、指すも引くも光なれや。盃の影の廻る空ぞ久しき。

子方／我が宿の。

同音／我が宿の。菊の白露今日毎に。幾代積りて涸となるらん。よも盡きじ、よも盡きじ。薬の水も泉なれば。汲めども汲めども、彌増に出づる菊水を。飲めば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛び立つばかり有明の。夜昼となき樂の。榮華にも榮耀にも。げに此上やあるべき。

〔樂〕

シテ／いつまでぞ。

同音／いつまでぞ。榮華の聲も、榮華の聲も、常盤にて。猶幾久し有明の月。

シテ／月人男の舞なれば。

同音／雲の羽袖を、重ねつつ。喜の歌を。

シテ／謠ふ夜もすがら。

同音／謠ふ夜もすがら。日はまた出でて、明らけくなりて。夜かと思へば。

シテ／晝となり。

同音／晝かと思へば。

シテ／月またさやけし。

同音／春の花咲けば。

シテ／紅葉も色濃く。

同音／夏かと思へば。

シテ／雪も降りつつ。

同音／四季折節は目の前にて。春夏秋冬、萬木千草も一時に花咲けり。面白や不思議やな。かくて時過ぎ頃去れば。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の榮華も盡きて。眞は夢の中なれば。女御更衣、百官卿相、千戸萬戸。從類眷屬、宮殿樓閣。皆消え消えと失せ果てて。ありつる邯鄲の枕の上に、睡の夢は覺めにけり。

間狂言／いかに御旅人、粟のおだいがいできて候。とうとうおひるなれや。

シテ／盧生は夢覺めて。

同音／盧生は夢覺めて。五十（いそじ）の春秋の。榮華も忽ちに、唯茫然と起き上りて。

シテ／さばかり多かりし。

同音／女御更衣の聲と聞きしは。

シテ／松風の音となり。

同音／宮殿樓閣は。

シテ／唯邯鄲の假の宿。

同音／榮華の程は。

シテ／五十年。

同音／さて夢の間は粟飯（あわい）の。

シテ／一炊の間なり。

同音／不思議なりや、計り難しや。

シテ／つらつら人間の有様を案ずるに。

同音／百年の歡樂も、命終れば夢ぞかし。五十年の榮華こそ、身の為にはこれまでなれ。

榮華の望も齡の長さも五十年の歡樂の。王位になればこれまでなり、げに。何事も一炊の夢。

シテ／南無三寶、南無三寶。

同音／よくよく思へば。出離を求むる知識は、此の枕なりけり。げに有難や邯鄲の、げに

有難や邯鄲の。夢の世ぞと悟り得て。望叶へて歸るりけり